JP37

医薬品安全性情報コミュニティの構築にむけた「妊娠と薬」に関する意識調査 —薬剤師，薬学生，研究者の場合—

(徳島大院薬，大東文化大外国語，
NTT 東日本関東病院薬剤，セイラシステム)
○坂本 久美子*，神部 順子，中田 栄子，佐々木 幹夫
後藤 尋規，中馬 寛，山内 あい子

1. はじめに

我々は、従来の勘と経験に基づいた閉鎖的な医療や創薬化学から脱却し、科学的根拠に基づいた医療と、情報化学的解析と副作用予測に基づいた新薬開発を可能にする新たな社会システムとして、オンライン共同体・『医薬品安全性情報コミュニティ』(図 1) を提案し、その構築をめざす研究を開始している[1] [2]。

今回、本研究を進めるにあたり、コミュニティメンバーである薬剤師や薬学生、創薬研究者が「妊娠と薬」についてどのような意識を持っているのかを明らかにするため、アンケート調査を行った。

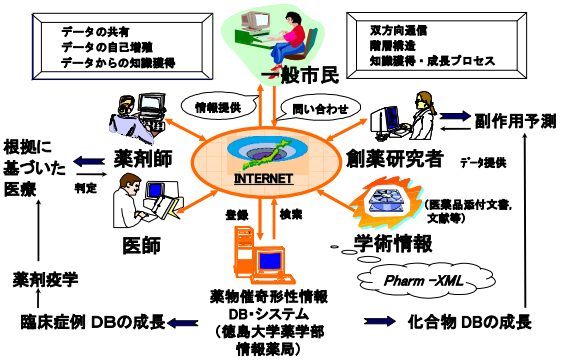

図 1. 医薬品安全性情報コミュニティの概念図

2. 調査方法

平成 16 年 6 月 5 日に開催された第 18 回徳島大学薬学部卒後教育公開講座の参加者に対して、33 項目にわたるアンケートを実施した。

3. 結果

参加者 211 名のうち 108 名の回答を得た。回答者の性別は男性 29 名、女性 78 名、不明 1 名であり、年齢別では、20 代が 57.4%と最も多く、以下 40 代が 16.7%、50 代が 14.8%であった。職種別では、学生が 47.2%、病院・薬局勤務の薬剤師が 36.1%、大学や企業の研究者が 8.3%であった。

「妊娠と薬」に関する情報を提供するインターネットサイトへの関心は高く、95%の人が利用したいと回答した（図 2）。

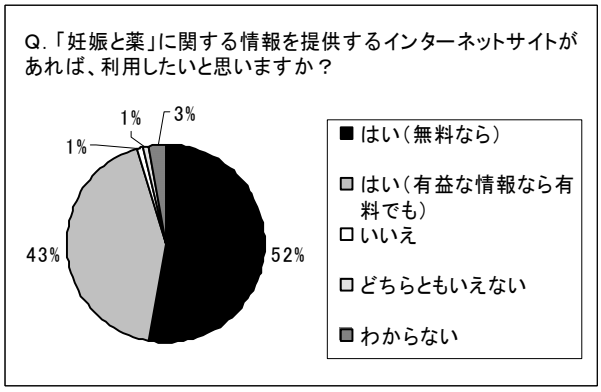

図 2. 情報提供の利用について

また、服用薬と出産結果の登録についても、協力的な傾向が見られた（図 3）。しかし同時に、登録する際、約 8 割の人が「個人情報が漏れないか不安」と答えた。

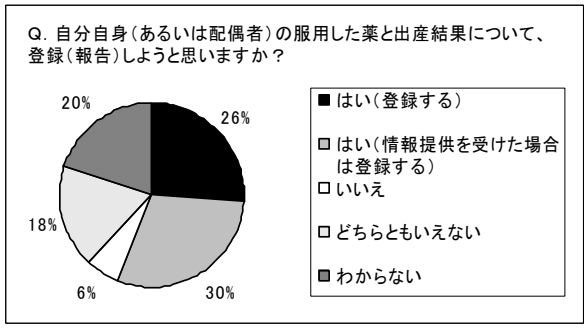

図 3. 服用薬と出産結果の登録について

「情報薬局では、副作用（薬物催奇形性）予測に基づくドラッグデザインに有用な情報提供を予定していますが、公開されれば利用したいと思いますか？」という問いに対して、研究者・学生の 80%が利用したいと答えた（図 4）。

* kumiko@ph.tokushima-u.ac.jp

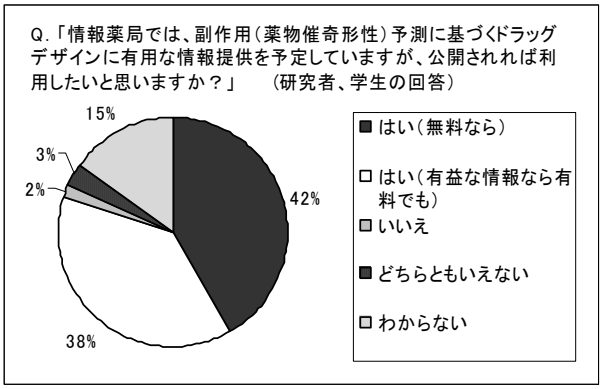

図 4. ドラッグデザインに有用な情報提供について

「新規化合物の生殖発生毒性試験情報が共有できれば、創薬研究者にとって有益だと思いますか？」という問いには、大学や企業の研究者全員が有益だとしながらも、「生殖発生毒性に限れば、製薬企業が自社開発の新規化合物情報を持ち寄り共有する毒性コンソーシアムを作ることが可能であると思いますか？」とたずねると、大学の研究者は100%「はい」と回答しているのに対し、企業の研究者は法的な強制力がないと難しいと答えている（図 5）。

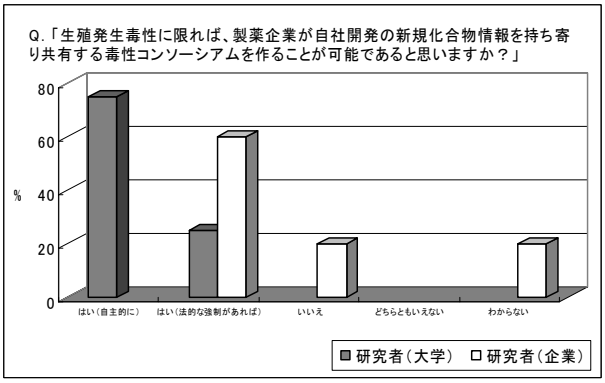

図 5. 毒性コンソーシアムについて

最後に、薬学部情報薬局における医薬品安全性情報を核とした社会的、学術的および教育的活動に対して79%の人が賛同すると答えた（図 6）。

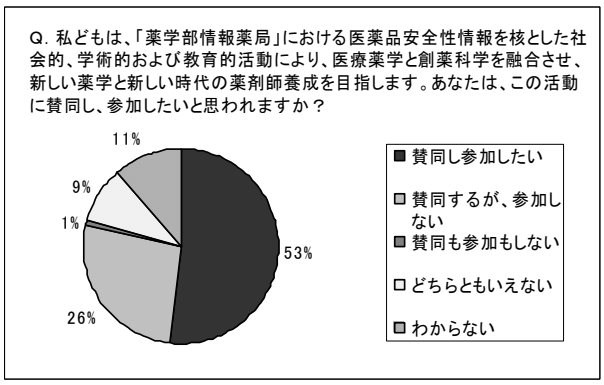

図 6. 薬学部情報薬局について

4.　考察

今回の結果より、『医薬品安全性情報コミュニティ』構築の必要性を改めて実感した。

また、コンピューター支援によるドラッグデザインが主流となった現在、開発が中断された化合物の生殖発生毒性試験情報は大変興味深いものである。しかし、その情報を公開し、共有するとなると、現実は厳しく、大学と企業の間の温度差が大きいことが明らかとなった。

さらに、生殖発生毒性試験情報はあくまで動物によるものであり、大量投与や種差などの問題もあり、簡単にヒトに当てはめることはできないという意見もあった。やはり、実際にヒトの臨床データは貴重であり、有害作用だけでなく、「妊娠期間中に薬を服用したが胎児への影響はみられなかった」例を含む多数のデータを蓄積することにより、新たな「知識」が生まれるものと考えられる。

5.　おわりに

ユビキタスネットワークが実現に向かいつつある今、インターネットを介した「妊娠と薬」に関する医薬品安全性情報コミュニティの活動は、多くの人々の関心と支持を得るものと予想される。今回の調査対象は“薬”に関係している薬剤師、学生、研究者であった。今後、さらに多くの“妊婦”をはじめとする一般市民の意識を調査したいと考え、現在、インターネットを利用した大規模調査を検討中である。

謝辞

本研究は科学技術振興機構・社会技術研究システム公募型プログラム「社会システム／社会技術論」により遂行された。

参考文献

[1] 山内あい子，中田栄子，中馬　寛：双方向・成長型薬物催奇形性情報コミュニティの構築．J Comput Chem Jpn, 2: 71-78, 2003.

[2] 山内あい子，中田栄子，佐々木幹夫，後藤尋規，坂本久美子，中馬　寛，医薬品安全性情報コミュニティの構築にむけて，月刊薬事，**46**，133-139, 2004.